

“農と食” 北の大地から

連載第72回

中高年による新規就農 その現状と課題を探る

農業人口の減少と農家の高齢化が急速に進むなか、農村地帯では担い手不足を嘆く声をよく聞く。その一方で、都市部の中高年のなかで農業に関心をもつ人が増え、「さっぽろ農学校」などの人気も高い。道が創設した「希農塾」の受講生や就農を実現した人たちの話を交えながら、中高年の農業志向と生産現場とのギャップを埋め、北の大地をより輝かせるために何が必要かを考える。



道立農業大学校の「希農塾」では農産物の販売現場も見学(やぶ田FARMで)

定年拂農の草分け、仁木町の「ヘルシー果樹園」ではヤギとポニーが仲良く暮らす

深刻化する道内の担い手不足 多くの人が参入しやすい環境を

道が初の研修コースを開設
「希農塾」で農業の基礎学ぶ

十勝晴れの日は続く十月下旬、道立農業大学校の中高年向け就農研修「希農塾」の受講生たちが、帯広市内の「やぶ田FARM」を訪れていた。研修の一環として、大阪から移り住んだ経営主の飯田秀行さん(195

6年生まれ)の話聞き、農場の様子を見学する企画である。

ここ清水町内に合わせて五ヘクタール余りの農地がある。多品目の野菜類などを有機栽培(JAS認証も取得済み)し、農産物や加工品を直接、消費者の元に届けてきた。受講生からは、「このハウスで栽培する野菜は?」「農業を始めた時期や

今までの経過は?」という質問が相次ぎ、飯田さんが関西人らしい快活な語り口で答える。農場内の直売所で買物したり、畑の野菜を試食する場面もあった。

十勝管内本別町にある同校は、農家の子弟らが寮に宿泊しながら、農業の技術や経営、機械の操作などを学ぶ研修機関。定年もしくは早期退職して道内で新規就農をめざす中高



年を対象にした「希農塾」は〇七年度から始まった。道がこうした研修コースを開設するのは初めての試みだ。PR不足もあり初年度の受講生はゼロ。〇八年度は札幌や旭川から訪れる三人が研修に励む。作物栽培や機械操作の基礎を身につけることが研修の目的。集合研修(2日間ずつ年2回)と通信講座(3回)、農業機械の利用研修(1回)の三つがセットになっている。

「目標は、就農後に何をやるのか」「どんな農業形態をめざすのか」とう販売するか」について、意識づけしてもらおうこと。事前の面接はなく、四十代以上で就農をめざす人は誰でもウエルカムです」

と、講師役の同校教務部主査・林弘幸さんが説明する。前日の座学では、農産物の価値を宣伝することの大切さを説き、「農業が一番弱いのはマーケティング力。それが身に付くと鬼に金棒だ」と強調していた。

都市周辺での野菜づくりへ 今後の生き方を探る人たち

受講生の五十嵐澄夫さん(57年、旭川市生まれ)は今年春、三十二年におよぶ横浜市内でのサラリーマン生活にピリオドを打ち、就農をめざして帰郷した。これまで培った空調関係の業務経験も生かしつつ、旭川かその周辺でハウス野菜にチャレンジできないか模索中だ。

「親が水田農家だったので高校まで作業を手伝い、農業のきびしさは分かっています。趣味的な農業ならば定年後でもよかったです。生活の糧にするには、五十の手賃いかりミットかな、と思った。組織に守ら

れているのとは違い、農業は自分でやる・やめるを判断できる仕事。サラリーマンとは違う充実感があるんじゃないか(五十嵐さん) 子どもは独立している。上川支庁主催の農業研修や同校の別のコースも受講し、顔を出すことで若い人を知り合え、モチベーションを維持できると意欲を見せる。

札幌市の検査技師、佐々木雅博さん(58年、同市生まれ)は、さっぽろ農学校やNPO法人の活動(08年9月号)都市農業のすそ野を広げる「さっぽろ農学校」(参照)に参加する一方、農業大学校にも通う熱心な受講生だ。遊休農地を借りて札幌市内での就農をめざすが、その土地を探すきっかけがない、という。

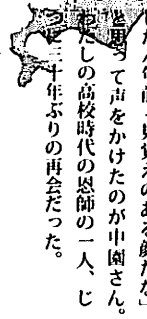
いまは少しずつ実習を重ねている。インターネットで検索し、少ない労力でもやれる方法を探しています。直売はあまり考えず、既存の流通にも合う技術レベルのものを作ることを基本にすえたい。少しずつ軟弱野菜に取りくみます(佐々木さん) と四、五年先を見据えながら、これからの生き方を探っている。

「希農塾」の知名度が低いことに加え、就農をめざす人は都市部に多いので



集合研修の一環として帯広市の「やぶ田FARM」を訪れ、有機野菜の栽培について耳を傾ける「希農塾」の受講生たち。座学では農業技術の基礎を学び、就農への意識づけにつなげている(写真右下)

“農と食”
北の大地から



上勝は遠く感じるのか、受講生は少ない。もったいない話だ。この企画を活用できる機会をもっと増やせないか、と思った。

10年前にゼロから出発して有機農業や直販態勢づくり

前出の飯田さんは、学生時代に農業のおもしろさを感じとり、就職後もずっと就農のチャンスを探ってきた。九四年に帯広市主催の農業塾



二十日大根を丸かじり、デジカメに収める受講生の五十風道夫さん

さん(37年、福岡県生まれ)が経営する「ヘルシー果樹園」では、ワイン用のブドウやリンゴ、サクランボなどを栽培するかわらわ、小動物も飼う暮らしが続いていた。

「リンゴや野菜をヤギに食べさせる」とミルクを出してくれるし、健康にも役立つ。生産に追われて一喜一憂する人よりも、本当の百姓として自給に近づけることができました。十五頭のヤギの噂は自分の孫以上に愛らしく、癒しになっていますよ」と中園さんは笑顔で話す。余市高校園芸科で教鞭をとっていた四十八歳のとき、妻の昌子さん(43年、函館市生まれ)が経営主になって五ヘクタールほどの離農跡地を取得した。定年帰農のバイオニアである。

もともと動物好きで、教員時代から牛を二頭飼って乳を搾り、アイガモを池に放したりした。ヤギの飼育は十五年ほど前から試み、経済動物としてよりも、子どもたちの情操教育や自然環境を守る視点を大事にする。清水町で「山羊サミット」を取材した六年前、「見覚えのある顔だな」と思われて声をかけたのが中園さん。入りの高校時代の恩師の一人、じ

「三十年ぶりの再会だった。」

(2年間の通信教育を受講したこと)をきっかけに、九八年に移住。研修中に知り合った愛国地区の農家が受け入れ組織をつくってくれた。ここは上勝農業の「等地」。新参者には農地取得は困難ですが、奇跡的に就農できた」と振り返る。

十年前、家庭菜園の講習会に参加したが内容を理解できず、「なんと惜けない」と落ち込んだ。肥料、種子、播種方法「すべてがチンプンカンプン。年配の農家に「何をしたらいいのか?」と尋ねると、「ホウレンソウでも作ってあげよ」。教えてもらいながら、少しずつ歩を進めた。勝手が分からず、がむしゃらに働き、血尿が出たこともあるという。

そんななか、芽室町内で農業や肥料を使わず自然農法をやっている人のところで実習する機会を得た。「草だらけの畑に家族三人が這いつくばって仕事をしていた。その野菜が日茶苦茶うまう、哲人だ。俺もこんな人になりたい」と思った。だから、ずっと有機農業を追求し、総菜業の許可を得て近年は加工品にも力を入れる。販売はすべて自分で手がけ、農協や市場には出荷していない。サラリーマン時代を思い出す

ヤギの飼育には、持病の糖尿病をかかえる自分自身の健康づくり、という目的もある。母乳に近く消化が良く、アレルギーを起こさず、ヤギの乳には、糖尿にも効果があるとされるタウリンが多く含まれるからだ。みずから乳を搾り、夫婦で毎日二リットルを飲む。冬場にはヤギ乳のチーズを作り、自家用にした。知人への贈り物にする。

「定年から十年、ずっと飲み続けて白内障が消えました。老化現象も抑えていますよ(中園さん)肌はツヤツヤしており、とても七十歳とは思えない。十月には京都で開かれた「全国山羊サミット」に参加し、交流を深めた。すでに三十頭のヤギを道内各地や青森、川崎などの仲間たちに譲り、そのネットワークを広げている。「しりべし」なんでも百姓くらぶの会員として小樽の都通商店街での販売会に出品したり、赤井川村の「ホビー」の丘観光牧場で果物を販売する。中園さん夫婦は張りのある生活を送ってきた。

かつての同僚たちで農的な暮らしに夢をいだく人は多かったが、実践した人はきわめて少ない。土地や住

「就農をめざす人は妥協せずに進んでほしい」と話す飯田秀行さん



ので、彼らを相手にするのは嫌なんだ。白山閣達な人柄に惹かれてか、直売所は来訪者のサロンのようになっていくらしい。

農場の一角に占むた小型トラクターが見える。土に埋もれていたものを五斗で買い取り、自分で修理した。ど根性がある人だ。就農を志す人には、こうエールを送る。「人の助けを必要とするときもあるけれど、やれないことは何も無い。できない「や」分らない」は答えじゃないよ。妥協をせず、自分の道を進んでほしい」

近隣に新規就農者が「組む。飯

宅、農業機械に退職金の大部分を投じなければならぬからだ。

「半数以上の家庭は奥さんが(就農に)反対し、老後の生活ができなくなる」と考え実現できずに終わる。老後を心配してマンションで暮らす人生はつまらない気がしますね」

農場をどう継承するか聞いてみた。「生活の豊かさや景観の良さを口にして、こんなところで暮らしたい」となれば、必然的に引き継ぐ人が現れます。日々、そう思われるような農場を築いていくだけで、あとはその人の情熱に任せたいですね」と、きつぱり言い切った。農作業に汗を流し、小動物を飼育することで健康を保ち、出会った人たちとの交流の輪を広げる——そうした生き方から教えられるものは多い。

会員向け販売に力を入れてゲストハウス通じて恩返し
脱サラして有村市高岡地区に移り住んだ田中勝吉さん(45年、愛知県生まれ)は、八年前に同市の新規就農第一号に認定された。二ヘクタールの農場では、さまざまな野菜類を無農薬で栽培する一方で、百坪ハウスが五棟、八十羽ほどの鶏も飼う。

そして、農場の生産物すべてを直販でさばっている。「晴耕雨読の自給生活」が長年の夢だった田中さんは九九年、定年前に退職する道を選び、札幌にある旧北海道農業担い手育成センター(宮田勇理事長)を訪ねたことをきっかけに、ここへ移住した。

田さんは自分の経験をすべて伝え、声援を送ることを忘れない。**ヤギを飼って健康を保ち仲間たちとの交流も広がる**

この連載で道央の農村地帯に移り住んだ人たちの営みを、「定年帰農の可能性」と題して紹介したことがある(03年4月号)。あれから約六年、その後の定年帰農の日々について聞くために十一月下旬、わたしは、人の登場人物を訪ねた。日本海や余市の町並みを望む後志管内仁木町のゆるやかな丘陵地帯、農業高校の教員歴が長かった中園

中園さんが飼育するヤギは人なつっこい。「15頭のヤギの噂は自分の孫以上に愛らしい」と相好を崩す



